

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. 1620

2014 年 5 月号



ピアウイ州の世界遺産、セーハ・ダ・カピバラ遺跡
写真提供：岸和田 仁『ブラジル特報』編集委員

ÍNDICE／目次

日ブラジル外交関係樹立120周年に向けて… 2

山田 彰

2015 年の日本ブラジル修好 120 周年に 向けたブラジルの日本まつり

ブラジル日本都道府県人会連合会

●社会・文化 …… 4

アマードの文学が描くブラジル
武田 千香

問題山積のワールドカップで優勝を狙う …… 6

ブラジル代表

川原崎 隆一郎

最近のブラジル政治経済事情 …… 8

—外務省中南米局提供情報その他より

●日系企業シリーズ …… 9

ブラジル・ヤマハ
ヤマハ音楽教室を再開して
内藤 修

●文化評論 …… 10

アカデミー受賞映画『それでも夜は明ける』
の重層的余波
岸和田 仁

●エッセイ …… 11

ブラジルにおけるM&A投資機会
片岡 万枝

イベント・新刊書紹介 …… 12

発 行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 1 階 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

発行人：大前孝雄 編集人：桜井敏浩

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org/

頒布価：700 円

日ブラジル外交関係樹立120周年に向けて

山田 彰

(外務省中南米局長)

1895年に日伯修好通商航海条約が調印され、日本とブラジルの間に外交関係が樹立されてから、来年で120周年を迎えます。その間、多くの日本人がブラジルに渡り、その子孫は約160万人ともいわれています。また、日本にも現在、日系ブラジル人の方を中心に19万人近いブラジルの方が暮らしています。遠く離れた国でありながら日本とブラジルの間には特別な強い絆があります。

1995年、日本ブラジル修好100周年記念式典において皇太子殿下は、1982年のブラジルご訪問を回顧しつつ、日本からの移住者とその子孫がブラジル社会に融和し、各界で活躍されている姿を目の当たりにし、大変心強く感じたと述べられています。

人と人との交流が進み、日本とブラジルはそれぞれの文化から多様な恵みを受け、互いの国を身近に感じるようになりました。しばらく前から日本でも食べられているポンデケージョ（チーズ入りのもちりとしたパン）や最近人気急上昇中のアサイーなどのアマゾンのフルーツを加工したドリンクは、ブラジルからもたらされたもの

のです。

ブラジルにおいては寿司をはじめとする和食の人気は相変わらず高いようです。日本サッカーはブラジルサッカーから多大な貢献・影響により発展してきました。ブラジルでは柔道も非常に人気があり、オリンピックでのブラジルの最多メダル獲得種目ですが、日系人の方々の貢献が大きいといわれています。昨年WBCに出場したブラジルの野球も日系人の方々の努力によって強くなりました。

2015年の外交関係樹立120周年について、岸田外務大臣は2013年9月にブラジルを訪問した際、フィゲイレド外相との間でそれぞれの国において多くの行事を実施して、さらなる関係強化のために盛り上げることで一致しました。

2014年のFIFAワールドカップ・ブラジル大会、2016年のリオデジャネイロ・オリンピックとあいまって2015年を日本とブラジルの相互の関心が高まる好機にしたいと考えます。両国の新たな歴史の中で様々な形で交流がより一層進み、可能性に満ちた関係が発展することを願っています。

2015年の日本ブラジル修好120周年に向けたブラジルの日本まつり

ブラジル日本都道府県人会連合会

ブラジル日本都道府県人会の主催するフェスティバル・ド・ジャポンは、初めは「日本郷土食・郷土芸能まつり」として行われ、日本の文化、芸能、料理などを日系およびブラジルの方々に知ってもらうことを目的に開催された。またこのイベントは利益を追うものではなく、日本の伝統文化の紹介と普及の場と考えており、その後、フェスティバル・ド・ジャポンと名称を変え今日に至っている。

1998年ブラジル日本移民90周年を記念して、日本の郷土芸能・郷土食をブラジル国民および日系人に伝えるためにブラジル日本都道府県人会（県連）の主催で始められた。イベントは日本で永い間受け継がれてきた郷土芸能や食文化を伝えるとともに、ブラジルの皆さんにも紹介したいと願いを込めて、サンパウロ市の後援によりサンパウロ市のセントラルパークともいえるイピラプエラ公園で1998～2001年まで、園内のマルキーゼ・ヴィベイロの会場で開催。その後は近くのサンパウロ州議会駐車場で04年まで開催された。規模が大きくなったこともあり、会場が手狭になり05年にサンパウロ州

政府イベント会場であるセントロ・デ・エスポジソン・エ・イミグランテ会場（現イミグランテ・コンベンション・センター）に移り開催されている。

県連主催のこのフェスティバルは、サンパウロ州のイベントカレンダーにも掲載され、3日間の入場者数は20万人を数え、海外で行われている日本祭では最大規模のものではないかと自負している。この開催には日本の企業はもちろんのこと、多くのブラジル企業からの協力、協賛があり、また多くの協会、団体の協力を得ている。

このフェスティバルへ遠距離（100km以上）からの来場者は、グループで来場すれば金、土曜日の2日間は入場料が免除されるなど便宜を払っており、地方での日本人会などではこの制度を利用してバスを仕立てて来ている。

テーマと内容

このフェスティバル・ド・ジャポンには毎回テーマを挙げている。2013年は『地球に優しい技術と進歩』、そして14年のテーマは『三方良し』で、これは自分たちが幸せを感じられるならば、それをまず喜び、その幸せをさらに他の人にも与えていこうとする人間性豊かな心、ポルト



フェスティバルジャポンの開会を告げる鏡割り



子どもたちに人気の絵手紙展

ガル語で“A Origem da Felicidade”を、今年のテーマとして掲げた。これは近江商人の言葉で、来場して日本文化に

文化を楽しむ参観者にとって良く、また展示、販売しているスポンサーやバザー参加者にも良く、さらに郷土食を提供して日本文化の伝承に努める県人会の者、ボランティアの人たちにも良い、つまり第三者に対して良くあれと願って決めたテーマである。

フェスティバル・ド・ジャポンの主なアトラクションは、「子供広場」。未来に夢を与える子供たちのため、ここでは折紙やぬり絵、玩具、また子どもたちに料理をしてもらったり、昔話などをしたり、子供たちにテーマを与えて遊びや夢を与える広場である。そのためには多くのボランティアが必要だが、ボランティアの人達がいろいろな遊びを考え、それが子供たちと連れてきた親たちを喜ばせる。

「文化芸能・スポーツ広場」では、フェスティバル・ド・ジャポンの文化芸能、そして日本の武芸のデモンストレーションを行う。生け花、茶道、書道、きり絵、折り紙、絵手紙、将棋、囲碁などいろいろなワークショップと展示が見られ、また、日本の伝統武芸である空手、剣道、合気道、柔術、ナギナタなどのデモンストレーションが披露されている。「熟年広場」は、第三世代と呼ばれる熟年者のための広場。高齢者向けの健康相談やマッサージ、スポーツ(ゲートボール、マレットゴルフ、ラジオ体操)などいろいろなことがテーマに沿って行われ、それはすべて無料で行われる。また、ラジオ体操、フォークダンスなどのデモンストレーションも行われ、これに参加することもできる。

「フェスティバルの主舞台」では、3日間を通じて50近くの団体が郷土芸能や音楽、太鼓、武術などを紹介する。和太鼓の演奏や、沖縄の伝統芸能である琉球国太鼓などは会場を沸かせる。また舞台ではニッケイコロニアで知られた歌手や、日本からの歌手などが舞台を盛り上げる。

2013年の舞台では、日本からマルシアの公演もあり舞台を盛り上げた。

World Cosplay Summit (WCS) という「コスプレ」の世界大会へのブラジル代表を決める大会もここで行われる。カーニバルの仮装に力を入れる国、ブラジルはコスプレの世界でも注目されている。ちなみにコスプレの世界大会は日本で開かれており、これまでブラジル代表は2回、世界大会で優勝の栄冠に輝いています。

フェスティバル・ド・ジャポンを彩るのは「ミス・ニッケイ」の選出。サンパウロ全域から立候補する人が多いのですが、近年ではアマゾンのパラ州やマット・グロッソ州からなどの候補者もいる。このミス・ニッケイは山井ケンジ司会によるもので、ブラジル国内から30人以上の候補者が、ミス・ニッケイの栄冠を争う。

フェスティバルで最も人気があるのは、「郷土食広場」。日本の47都道府県と協賛団体である幾つかの福祉団体の参加した食広場で、ブラジルにある47ある都道府県人会が、郷土の食、また日本の料理を安価に提供するものである。材料など当地では手に入らないものもあるが、そこはいろいろ工夫し、普通、サンパウロでは食べることができないいろいろな郷土料理を食べていただこうと思っている。そして県人会のブースで手伝っているのは、ボランティアの皆さんの老若男女で、一世から二世、そして三世、いろいろな世代の人達が、自分のゆかりのある県人会のために食広場のブースを盛り上げる。

日本とブラジルの交流に成果

こうした大きなフェスティバルにはいろいろな問題が起こりがちだが、これをどのように解決するかがスポンサー探しとともに、フェスティバルの成果に影響を与える。このようにして県連の主催ではじまったフェスティバル・ド・ジャポンは、すっかりブラジルの地に根付き、この催しを通じて日本伝承文化の伝達、食べ物を通じての日本とブラジルの交流ができてきた。

このフェスティバル・ド・ジャポンを続けて行くには、母県の協力が必要である。例えば郷土食のレシピ(作り方)を持っていたからといって同じものが出来る訳ではなく、その郷土料理のできた背景とか歴史を伝えることも必要である。これからのことを考えると、母県の物産を紹介するアンテナショップも考えてよいのではないかなと思う。昨年あたりからまだ少ないがいくつかの県や日本の業者が参加やリサーチを行っている。難題だが、海外の県人会に対する県側のさらなる力の入れ方が期待される。これを上手く解決するには、やはり県人会が母県との交流を密にすることである。

今年(2014年)はワールド・カップがブラジル各地で6月に行われ、来年は日本ブラジル修好120周年である。県連は日本とブラジルを結ぶ修好120周年と結びつけたイベントを、このフェスティバル・ド・ジャポんで展開したいと考えている。

アマードの文学が描くブラジル

武田 千香

(東京外国語大学 教授・協会顧問)

近年はパウロ・コエーリョに座を明け渡してしまったが、ひと昔前までジョルジ・アマード (1912～2001 年) は、日本でもっとも読まれているブラジル人作家だった。邦訳作品は 8 冊にのぼる。

アマードは、その名のとおりに民衆から大いに愛され (アマード)、いまでもその作品は読み継がれているばかりでなく、舞台化やドラマ化も行なわれている。つい最近も『ガブリエラ』がドラマ化されて、話題を呼んだ。だが、そうした人気とは裏腹に、批評家や文学研究者からは著しく不評な作家でもあった。大学院時代にブラジルへ行ったときに、どの作家を研究しているかと聞かれ、ジョルジ・アマードだと答えると、たちまちにして相手の学者の顔が曇り、首を横に振りながら、残念ながらアマードの文学はひじょうに批判が多いんだと呟かれたのを覚えている。批判されたのは、とりわけ言語の「乱れ」や過剰な性描写で、当時は、実際の人気と研究者らの不評判のギャップに戸惑ったものだ。だが、いまになって考えれば、それはやはりアマードがもっぱら民衆に寄り添ってブラジルを描いたからなのだ。

秩序と脱・秩序

『未亡人ドナ・フロールの理想的再婚生活』(1976 年) という映画を観たことがあるだろうか？ これは、ブルーノ・バベット監督によるジョルジェ・アマードの『ドナ・フロールと二人の夫』(1966 年) の映画化である。主人公はバイーア州サルバドルに教室を開く料理の先生のドナ・フロール。賭け事と女性と酒ばかりに興じるどうしようもない遊び人のヴァジーニョと結婚しているが、カーニバルの最中の日曜日、その夫が急死する。生前はさんざん泣かされたが、いざ死なれてみると、ドナ・フロールの心のなかにはぽっかり穴があいてしまう。

次に再婚した相手は薬剤師のテオドーロ。その職業が象徴するようにヴァジーニョとは正反対。真面目で物静かで貞実な男性で、趣味はクラシック音楽。以前とは打って変わって、結婚生活はなにひとつ不自由のない、じつに平和なものだった。だが、ドナ・フロールは次第に物足りなさが募り、ヴァジーニョと交わした日々が恋しくてたまらなくなる。

結婚一周年記念の宴が終わった矢先のことだった。ヴァジーニョがひょっこり現われ、一糸まとわぬ姿で関係の再開をしきりにドナ・フロールに迫る。その姿は、彼女以外

の人には見えないが、夫を裏切りたくないドナ・フロールは必死に振り払う。だが、けっきょくは受け容れることになり、本の表紙や映画のジャケットカバーに描かれている、二人の夫を両手にダブルベッドに横たわるドナ・フロールの刺激的な絵どおりの、3 人の結婚生活がはじまるのだった。

たしかに批評家や研究者らの批判もわからないではない。私がこの映画を最初に観たのは大学 2 年生のころで、ほとんど全裸で現われるヴァジーニョと (観客には後姿しか見えないように撮られているが)、強調されるドナ・フロールの官能性に、まだうら若かった私は、なにやらボルノ映画を見せられている気分になったし、生きている夫と死んだ夫の二人との共同生活を始めるという設定に関しても、単にドナ・フロールの願望か夢を描いただけの荒唐無稽な話のように思えたのを覚えている。

だが、いまになって考えると、それがブラジルなのだ。現実と超現実が混じり合う日常、規律と人間くささが共存する社会。一見、ドナ・フロールの欲望を描いたおちゃらけに見えるその作品も、実は現実の人や文化や社会をみごとに描き出す“まじめな”作品なのだ。たしかに映画だけを見れば、ドナ・フロールが肉欲に負けたと単純化できるかもしれない。だが、小説にはもっと深い世界が描きこまれている。

ドナ・フロールが駆られたのは単なる肉欲ではない。彼女は二つの愛に引き裂かれたのだ。彼女は「どうして人間はだれも (……) 二つの愛のあいだで引き裂かれなくならないのかしら？ なぜ心は、このように相容れない正反対の二つの気持ちを一度に抱いてしまうのかしら？」と思い悩む。一方、ヴァジーニョは、次のようにいって、三人で暮らすことを提案する。

俺は君に愛を与えることしかできない。君が必要な残りはすべて奴だ。持家も夫婦間の貞節も、敬意、秩序、配慮、安全。それを君に与えるのは奴だ。なぜなら君の愛は、そうした高貴な (しかし七面倒くさい) ものからできていて、君は幸せになるためにはそれらすべてを必要としているからだ。だが、俺の愛だって、君は幸せになるために必要だ。この歪みだらけの過ちの不純な愛、君を苦しめるこの放縦で燃えるような愛だって。

つまりドナ・フロールが三人の共同生活によって手に入れたのは、規律正しいテオドーロに象徴された「秩序」(住む家や敬意や貞節といった高貴なもの) と、遊び人ヴァジーニョの「歪みだらけの過ちの不純な愛」、すなわち「脱・



ジョルジェ・アマードの『ドナ・フロールと二人の夫』>

制度を課せられてきたが、実際にはヨーロッパとは違う現実があったから、ヨーロッパ伝来の「秩序」を受け入れながらも、それからは逸脱する「脱・秩序」の部分をも併存させながら人・文化・社会を形成させることとなった。

もうひとつの世界／人間の境地

それにしてもヴァジーニョに重ね合されている「脱・秩序」は、どのように考えたらいいのだろうか。ここでヒントになるのが、ブラジルの碩学、文化人類学者のホベルト・ダマッタの指摘である。ダマッタによれば、ブラジルの人々は、現実世界のほかに「もうひとつの世界」という境地を持っているという。

「もうひとつの世界」とは、まずは死者や神々や聖人やオリシャ（カンドンブレの神々）が暮らす、いわゆる「あの世」である（だから死者ヴァジーニョに重ね合されているのだ）と同時に、二元論的体系で構成される現実界のあらゆる対立が統合される境地でもある。ドナ・フロールは、テオドーロ以外の男性と関係を持つことは不倫だと考えて抵抗した。だが、そもそも不倫が悪であるなどという考え方は、しょせん秩序界のものだ。善だの悪だの言うてみたところで、たしかにそれは秩序界では意味を持つものかもしれないが、秩序界を脱した「もうひとつの世界」からみれば、出所はいずれも同じ人間である。そこから見れば、秩序界の諸制度にしても諸規範にしても、すべてが「人間」という存在の外でっちあげられた作り事とすらいえるのだ。

ダマッタによれば、ブラジルの社会は、現実の世界と「もうひとつの世界」が相互に補完し合うかたちで成り立ち、そのいずれかが欠けてもブラジル社会ではなくなるといえる。ブラジルの人々は、それらの領域のあいだを常日頃

秩序」の愛の両方を兼ね備える境地だったのだ。

この「秩序 (ordem)」と「脱・秩序 (desordem)」という対概念は、ブラジルを理解するうえでたいへん重要で、他の文学作品やブラジルに関する研究書にもよく出てくる。ブラジル

は、常にヨーロッパ (ポルトガル) から規範や

から絶えず移動し、そのたびに行動基準が、それぞれの領域に即したものに切り替わるらしい。ドナ・フロールがテオドーロ (秩序) とヴァジーニョ (脱・秩序) のいずれとも暮らすという設定は、ブラジルの人々の精神構造の表象と考えれば、荒唐無稽ではないのかもしれない。

罪なき世界

さて、人間という原点に立った「もうひとつの世界」を持つことは、現実社会の秩序を客観的に見る視点を獲得することでもある。すると「罪」の感覚も、秩序界の発想のみで行動する人とは大きく異なってくる。なぜならば善と悪、常識と非常識、正と不正といった秩序界の対立が相対化されるからだ。この境地を持てば持つほど、人は厳格な規律に縛られることなく、人間の本質的自由を獲得する。

この姿を体現しているのが、アマードのもっとも有名な小説『丁子と肉桂のガブリエラ』(原作 1960 年、邦訳：尾河直哉訳、彩流社、1995 年) のヒロイン、ガブリエラだろう。1920 年代の「カカオの大地」、ブラジル北東部のイリエウスを舞台に繰り広げられる大農場主らの戦いのドラマを背景に語られるのは、バールの店主ナシブ・サアドとガブリエラの恋の物語だ。ガブリエラは、身分証明書も出生証明書も持っていない、誕生日も父親の名前も知らないモレーナ。鳥かごの小鳥も逃がしてしまうほどに自由を愛し、靴を履くことも嫌う。ナシブはついに恋を実らせ、晴れてガブリエラを妻に迎えるが、彼女は「花によっては庭の枝にある間は香しく美しいが、花瓶に活けられると、たとえ銀の花瓶でも枯れてしまう」ような女性だった。社交界でサアド夫人としてふるまうことはもちろん、結婚という制度に拘束されることも耐え難く、当然「貞節」という感覚からも無縁だった。けっきょくナシブは彼女を結婚というから解き放ち、もとの自由な関係に戻し、「ただそこにある」そのままのガブリエラを受け入れることになる。ここでいう「自由」は、権利や義務や法律などとは異次元の、人間本来が持つそのまもの「自由」を指す。

それは、地位や財力といった社会的な格差が捨象され、「みな同じ人間」という人間的平等からの発想に立つ境地でもある。ドナ・フロールが、秩序以外に必要としたのも、そうした人間の境地だったのだ。よくいわれるブラジル人の心温かさや、人間的欲望に対する大らかさは、こうした「人間の境地」からくるのかもしれない

とはいえ、ブラジルのそうした人間くさい脱・秩序的な側面は、ヨーロッパ近代を理想とする人からみると、歓迎できない恥の部分と映ることもある。アマードの文学、とりわけ後期の作品群が批評家や研究者から嫌われた理由はそこに求められるだろう。だが、それはあくまでも秩序界の規範の視点に立つ人の見解だ。アマードは、秩序界とともに「もうひとつの世界」を併せ持つブラジル、すなわちヨーロッパにして非ヨーロッパでもあるブラジルをみごとに描きこんだ。だからヨーロッパ近代を理想とするエリートたちには嫌われたのだ。

問題山積のワールドカップで 優勝を狙うブラジル代表

川原崎 隆一郎
(月刊誌『ピンドラマ』代表)

四年毎に開催されるサッカーのワールドカップ（以下 W 杯）が、1950 年以來 64 年ぶりにサッカー王国ブラジルに帰って来る。記念すべき第 20 回大会の開幕まで残すところ 2 か月（本稿執筆時点）。筆者はサンパウロに住んでいるが、日本の人たちからは例外なく、今年は W 杯で盛り上がってるでしょう、といわれる。盛り上がっていないといえは嘘になるが、2002 年の日韓共催大会は準備万端整って、さあいらっしゃい、という感じで盛り上がっていたのではないかと、日本にいなかった筆者は勝手に想像するが、そういう意味では盛り上がっていない。

なぜか日課のように観ているテレビのスポーツ討論番組では、未完成のスタジアムとスタジアム周辺のインフラの問題がほぼ毎日取り上げられている。取り上げられる理由は、ご想像どおり、完成していないものがまだまだあるからだ。

身近な話をすると、サンパウロでは開幕戦を含む 6 試合が、サンパウロの人気チーム、コリンチアンスの新設スタジアムで行われる予定だが、まだスタジアムが完成していない。昨年 12 月完成を予定していたが、2 度にわたる建設作業員の死亡事故で工事が遅れている。街中の道路工事を見れば、作業員 1 人が働き 2～3 人がそれを眺めるといふ光景が当たり前のこの国で、工事の遅れ自体は驚くに値しないが、世界中が注目する中で死亡事故がらみで工事が遅れ、大会に間に合わないのでは？ となるとちょっとやかましくなる。最初の事故は 11 月 27 日。観客席の屋根の最後のパーツを持ち上げるクレーンがパーツもろともスタジアムに向かって倒壊した。この事故で作業員 2 名が死亡。地盤の緩いところに据え付けられていて、地盤沈下のために倒壊したらしい。笑い話ではないが、この高さ 114 メートルのクレーンより大きいクレーンがブラジルにないため、倒壊したクレーンを持ち上げて撤去できず、分解して撤去しないと工事が続けられないということだった。10 月末時点で 90% 完了、年末に間に合うといっていたのが（真偽は確認のしようがない）、4 月末に延びた。だが、クレーンの分解と撤去が異常な速さで年明けに完了したのは驚いた。やればできるんだな、と。安心していったところへ 3 月 29 日、誤って装着していた安全ベルトが外れて作業員が 8 メートルの高さから転落して死亡。再び工事は一時中止となり、完成は 5 月 15 日ということになっている。完成といっても、試合ができる程度に完成、で未完のまま使用するという報道もある。いずれにせよ事故が再び起こらないことを祈るのみである。

ちなみに、当スタジアムの建設費用は、当初試算の 8 億レアルが 10 億レアルに跳ね上がっていて、うち 3 千万レアルがペトロブラスの石油輸送パイプラインの除去費用な

のだが、工事を増やす（費用を嵩ませてピンハネを増やす）ためにわざわざパイプライン上に建設する設計を行ったとの悪い噂も流れている。ついでに、ブラジルのスタジアム建設費が、過去のワールドカップで最も高くなっているという比較があるので紹介すると、観客席 1 席にかかった建設費は、ブラジルを 100 とすると、南アフリカが 90、日韓が 86、ドイツが 58 とのことだ。

ブラジル W 杯開催が決定した時、公費は投入しないと FIFA もブラジル側の運営組織もいつていたはずなのだが、元代表選手で現下院議員のロマーリオ氏によると、投入される公的資金は 280 億レアル（1 兆円以上）だという。同氏によれば、2010 年南ア大会は 77 億レアル、06 年ドイツ大会は 107 億レアル、02 年日韓大会は 101 億レアルの公的資金が投入されたとのことだ。ちなみに、本人が優勝した 1994 年米国大会は公的資金は 1 セントも投入されていない。

現時点で建設が完了していないスタジアムは、サンパウロ以外ではクリチバのみとなったが、先日もポルトアレグレ市議会でもスタジアム周辺の臨時施設の費用を公費で賄うか否かで紛糾していた。どこのニュースを見ても具体的な内容に触れていないのだが、どうも報道陣向けのテントや機材などの調達費用のようである。その他にも、W 杯で普段の何倍もの乗降客がある空港のインフラ、バスや道路などスタジアムへのアクセスなど、スタジアム以外のインフラに関しては、3 月初旬時点で、予定の 18% しか完成していないとの報道もあり、筆者には事細かく各開催都市のインフラの詳細を調べている時間はないが、もし調べたとしたら、膨大なレポートができるのではないかなと思う。

サッカー周辺の話を経々としてしまった。代表選手はほとんどが欧州でプレーしていて、ブラジル国内の問題に毎日間近に接することもないため、それ程わずらわしくなろうというのは幸いである。今年の欧州チャンピオンズリーグでベスト 8 に進出したチームの先発選手の 3 人に 1 人はブラジル人選手で、代表またはそれに匹敵するレベルの選手たちである。この中で最も注目され、代表の中心選手として W 杯で活躍が期待されるのが、バルセロナ（スペイン）所属弱冠 22 歳のネイマールである。昨年のコンフェデレーションズ杯で初めて観た人は驚いたのではないかなと思うが、ブラジルでは 2009 年、17 歳の時から名門サントスで試合に出場し、数々のタイトル獲得に貢献している。見ている者を驚かせる奇想天外な発想のプレーの数々は、世界のサッカー史上でも特殊な才能を持った選手だと認めさせるのに十分である。筆者は 1993 年から間近でブラジルサッカーを見ているが、彼以上の才能を持った



ブラジル対イングランド戦でのネイマール＝2013年6月2日＝
(撮影者：APF 千葉康由)

選手は見たことがない。間違いなくロナウジーニョ、カカー以上である。

ブラジルのメディアも、欧州のメディアも、ネイマールに対して手厳しい報道が多いが、巨額の移籍金で世界のトップクラブへ移籍したことに対するやっかみが多分に入っているのだろう。考えてみてもらいたい。バルセロナで活躍したブラジル人選手は、ロマーリオ、ロナウド、リバウドが有名だが、最初から欧州トップクラブのバルセロナへ移籍した選手は一人もいない。数年他のクラブでプレーして欧州サッカーに慣れてから移籍している。欧州のスピードと激しさに対処できないのではないかと、との心配をよそに、移籍後わずか1～2か月でネイマールは活躍し始めた。

世界最高のセンターバックといわれるチアゴ・シルバを主将に、欧州の強豪クラブに所属する優秀な選手たちを擁するブラジル代表は、地元の利もあり、有力な優勝候補のひとつだ。率いるL・フェリペ・スコラリ監督は2002年優勝監督、コーディネーターのカルロス・A・パレイラは1994年優勝監督だ。

スコラリ監督が身上とする手堅過ぎるサッカーと本人の独裁者的傾向には批判も多いが、点を取られなければ必ず1点は取れるのがブラジルサッカーだと彼は考えていると筆者はみている。過去の戦績を調べると、第1回大会から全大会出場の代表は104試合戦い、無得点に終わった試合はわずか11試合だけだ。華麗なサッカーで世界を魅了しながら試合にも勝てたのはベレの時代だけで、リベリーノの時代もジーコの時代も華麗なサッカーで守備を疎か

にしたため敗れている。

ブラジル人も世界中の人々もブラジルサッカーに華麗さを求めているようで、1994年代表（ロマーリオの時代）は優勝したにもかかわらず守備偏重だったため激しい批判にさらされた。2002年代表（ロナウド、リバウドの時代）は守備重視しながらも攻撃にタレントを擁し完璧な勝利を収めたが、クライフ氏（オランダ）などに強烈に批判された。

この10年ほど迷走した感のある代表だが、ネイマールが成長、オスカル、パウリーニョなど、要所に優れた選手を配し、昨年のコンフェデ杯でも見せたように、守備攻撃ともにスピードとテクニックと強さを兼ね備えたサッカーができる代表になったと筆者はみている。十分に優勝を狙える。ただ、「コンフェデ杯に優勝した国は翌年W杯に勝てない」というジンクスがあるが、前大会はスペインが「ユーロに勝った国はW杯に勝てない」というジンクスを破った例もあるので、「ジンクスは破られるためにある」と考えて応援しよう。

地元の利ということでは、半世紀以上に6か所（ポルトアレグレ、クリチバ、サンパウロ、リオデジャネイロ、ペロオリゾンテ、レシーフェ）だった会場が、今回は12か所（ブラジリア、クイアバ、サルヴァドール、ナタル、フォルタレーザ、マナウスが加わる）に増え、ブラジル中を移動する大変さに加えて、ブラジルの6～7月の南北の寒暖差（北は常夏、南は冬）が、特に欧州の選手たちには厳しいことだろう。

ところで、昨年のコンフェデ杯の時、世界中に報道されたが、W杯反対のデモが全国で起こった。「W杯に使う金があるなら教育医療に使える」というデモだ。W杯中にも起こるだろう。上述したように、公金は使わない、が建前だったのだから。私が日本でサッカーをしていた時のブラジル人元コーチは、「代表に優勝してほしいくない」といつている。優勝すれば何も悪いことはなかったかのようにまたすべてが元に戻ってしまうから、とのことだ。同様の考えの人はかなり多いようだ。そんな人々を代弁するかなのような歌が最近インターネットで流れているのを見つけた。“Desculpe, Neymar”（「ゴメンね、ネイマール」Edu Krieger 作）という曲だ。

「ゴメンね、ネイマール。君達の応援はしないよ。……金儲けのために汚いことをする泥棒達に僕たちは率いられている。……美しい記念碑的なスタジアムはあるけど、学校も病院も崩れそうになってる。……」といった内容の歌詞だ。

64年前の大会、観衆20万人のマラカナン・スタジアム（リオ）でウルグアイに決勝で敗れ涙をのんだブラジル代表。何としても地元で優勝したいと思っているはずだ。ブラジル代表のリーグ戦の試合のチケットも、ブラジル代表が勝ち進むであろう試合のチケットも全部売り切れで、代表の試合はすべて超満員になるだろう。同時に、「目覚めた」民衆たちはデモを行うだろう。そしてW杯の後、今までのブラジル人のように、W杯は大成功だった、優勝してよかった（バカヤロウ、負けやがって）、とやり過ぎた問題を忘れて喜ぶ（悲しむ）のだろうか？

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

経済が直面している 10 の問題点

2月7日付コヘイオ・ブラジリエンセ紙は、10月の大統領選挙の鍵になるとして、経済の現状の10の問題点を指摘している。

1. **電力不足**—水力発電に必要な貯水量が低く頻繁に起きている停電を防ぐために火力発電使用を増やさざるを得ないが、これにより消費者に高コストが転嫁され、インフレが進むことも懸念される。一昨年平均で2割の電力価格削減を約束したルセーフ大統領の面目を保つためには、電力会社への補助金を大幅に引き上げなければならないだろう。2. **財政収支の悪化**—政府は緊縮財政を叫ぶが、市場は信用していない。電力補助金を引き上げた場合、GDP比2%相当の財政黒字は達成できなくなり、企業家、消費者、市場の信用度はさらに悪化するだろう。3. **格付け引き下げ**—格付け各社のブラジル格付け引き下げ傾向に、政府は財政緊縮化に向けた明確なシグナルを発出する必要がある。4. **GDPの低成長**—2014年の成長率予想はわずか1.5%（13年は2.3%）で、そうなれば過去20年で最低。5. **インフレ**—過去12か月間でレアル安が2割進み、今後1米ドル＝2.6レアルまで進むと予想されているが、その場合インフレ率は目標上限の6.5%を超える可能性がある。6. **金利引き上げ**—インフレ抑制のため、昨年4月から現在までSelic（政策金利）は7.25%から10.5%に、今後数ヶ月以内に11.75%まで引き上げられると見られている。7. **燃料価格引き上げ**—ドル高はペトロブラス（石油公社）の決算に重くのしかかっており、さらに進めば昨年11月に続く燃料価格調整が行われる可能性があり、これもインフレを促す一要因となり得る。8. **工業生産落ち込み**—昨年比マイナス3.5%減。1,300の工場が休業しており昨年比2割減、工場稼働率は81.4%。9. **貿易収支**—ドル高にもかかわらず、輸出が伸び悩み。競争力がなくなりブラジル産品は重要な市場を失っている。1月に貿易赤字は1月としては史上最大の40億ドル。10. **経済指標**—1月にICI（工業信頼度指数）は8か月連続で史上平均より低い99.5ポイントを記録、またICC（全国消費者期待感指数）は09年6月以降最低の108.9ポイントを記録。

ルセーフ政権の支持率低下と経済界の反応

4月2日付週刊誌ページャは、石油公社が米国のパサデナ製油所買収に関して10億ドルの損害を被った件等については、政府はルセーフ大統領の再選までには風化すると楽観視していたが、先週の世論調査で政府支持率が7ポイントも低下したと発表された途端に株価は上昇に転じ、Bovespa（サンパウロ株式取引市場指数）が3.5%上昇、特に石油公社8%、電力公社10%、ブラジル銀行6%等と政府系企業の株が急上昇した。このことは経済界がルセーフ政権を諸悪の根源とみなし、ルセーフ大統領の再選を望んでいないのは明白であり、今後も政府支持率が下がれば下がるほど株価が上昇し、企業の投資意欲は高まることになろうと報じている。

経済界がルセーフ政権を敬遠している理由は、経済に対する過度の干渉にある。例えば石油公社と電力公社の場合、政府が人気取りのために燃料価格および電力料金を低く抑えていることから、何百億レアルもの損害を被っている。石油公社の株価は2011年1月の政権発足時の24.43レアルから本年3月には12.57レアルまで落ち込んでいた（支持率低下による上昇後の3月末には15.5レアル）。つまり、同公社株価はルセーフ政権の3年間で価値が半減したことになる。市場関係者は、政府の政治的な理由での干渉さえなければ、同公社は世界で有数の石油会社になっていたと考えている。また、現政権が財界人のことを「国民を搾取して金を儲けることしか眼中にない連中」と見下し、健全な投資環境を望む財界人の期待に応えていないことも、経済界の反発を招いている。

ブラジルの有権者は次の大統領選挙において、ルセーフ政権の国家主導型の経済モデルと、野党候補（PSDBのネーヴェス上院議員・前ミナスジェライス州知事およびPSBのカンボス・ペルナンブコ州知事）の民間主導型の経済モデルのいずれかを選択することになる。

中国の中南米向け融資

4月4日付経済紙バロールが、中国のブラジルを含む中南米諸国向け融資の現状を報じている。2012年の35億ドルから13年には153億ドルに急増し、05年からの累計では1,000億ドルを突破した。これは競争力のある製品や商品の生産企業にとっては、中国がより重要な資金供給源となっていることを示している（中国の中南米向け融資の過去最高は10年の370億ドル）。中国の国営銀行である中国開発銀行（CDB）と中国輸出入銀行（Chexim）は、中南米諸国に対し世界銀行、米州開発銀行（IDB）、米州輸出入銀行よりも多額の融資を行ったことになる。中国によるこれらの融資は、リスクが比較的高く、世界市場での資金調達に難しい中南米諸国に集中して行われている。

1位はベネズエラで05年からの累計では506億ドルと、中南米融資の半分を占める。アルゼンチンは同141億ドルに達している。中国の融資条件ガイドラインは柔軟（内政への条件を押しつけない）だが、一方で中国向け石油販売や中国からの部品購入を要件化している特徴が見られる。

中国は米国を抜いてブラジルの最大の貿易相手国になっているが、13年はブラジル向け融資を行っていない。昨年11月にテメル副大統領が北京訪問の際、李副主席からブラジル国内の大規模プロジェクトへの中国融資の対価を、商品で受け取るとの打診を受けた。

これはベネズエラ向け融資と同じく、中国国内で必要な商品をブラジルから確保するための手法であると考えられ、実際にルーア政権下での中国の石油公社向け融資は、石油輸出が前提であった。しかし、かつて中国のBNDES（ブラジル国立経済社会開発銀行）向け融資は、ブラジルが調達できる国際市場からの資金の金利に比べ高利だったため打ち切りとなった。

第 30 回

ブラジル・ヤマハ

ヤマハ音楽教室を再開して

内藤 修

<ヤマハ・ムシカル・ド・ブラジル社長>

1887年のオルガンの修理・製造に始まり、「山葉風琴製造所」を経て1897年「日本楽器製造(株)」として設立され、現在に至る弊社の変わらぬ特性として、開発・製造・販売という通常の製造業の業務活動に加え、教育・普及の重視があります。創業のきっかけが学校のオルガン修理、それを生業として製造する過程で国産振興の国策のもと文部省の指導を受け、教育需要を担うようになった創業期。終戦後軍需工場から楽器製造に回帰する中で、学校音楽のためのハーモニカに始まる学校音楽用の楽器開発・供給協力。更に下って鍵盤楽器の演奏人口拡大のため、1954年にオルガン実験教室、66年には(財)ヤマハ音楽振興会を発足・独立させ、純粋に文化・教育的な見地からヤマハ音楽教育システムを構築しています。現在の弊社グループの主な教育・普及活動は、特に海外ではこの音楽教室と学校音楽振興が主なものです。

学校音楽振興というのは、楽器供給だけでなく、授業で先生が指導し易い教材を提供したり、講師を学校に派遣したりといった活動が具体的なものですが、それに先立ち学校で音楽を教えることの意義を伝えることが難しいところです。また主に使われるリコーダーは、よく玩具扱いを受け軽んじられますが、価格に比べて楽器としての完成度は高く、その特性から義務教育課程など広い範囲に向けての音楽教育に適しています。こうした音楽の意義、リコーダーの有用性を伝えるのはなかなか骨の折れる仕事です。

弊社のブラジル現法(Yamaha Musical do Brasil Ltd.: YMDB)創業は1973年ですが、初期から鍵盤を使う音楽教室は大事な活動でした。最盛期には全土で2万名ほどの生徒を数えたと聞いています。残念ながら輸入制限により営業活動を休止し、教室運営を支えた駐在員も帰国、休眠状態に入った85年から数年後に、音楽教室も活動を停止しました。当時の駐在員は、子供達や講師さん達への思い入れが強かった分、断腸の思いだったといえます。その後1990年、いろいろ制約は残るものの輸入が可能になり、駐在員事務所として再開しました。音楽教室の再開も検討しましたが、当時の状況では安定した運営に自信がなく、将来に向けての課題としました。営業はインポーターを介したもののから次第に業容を拡大することができ、97年に商品を限定しながらも輸入・卸売業務の再開を果たすことができました。徐々に取扱商品を拡大して今日に至ります。

再開当時、私はマイアミにあった現地法人(現在はパナマに移転)から担当者として、毎月出張して直接サポート



Sopro Novo セミナーの風景

をしていました。音楽教室は無理でしたが、普及活動は当社のDNAですから、代わる活動として、より広い範囲にアプローチできるリコーダーに取組むことにしました。需要層が大きいことと価格の障害や在庫による品質劣化の心配が比較的小さいことも大きな要素でした。

リコーダーの普及活動というのは、教える人を養成する活動です。1992年からサンパウロ、クリチバ、リオデジャネイロからベレンまで、展開の種を求めているいろいろな場所へ、日本から招いた講師と共にでかけました。人・仕組みを作り現地だけでの自転を目標に何年か連携先の模索を続けましたが、特にブラジルでは州や市などの公的機関が当てにならず、活動継続の仕組み作りがもっとも悩んだ点でした。仕組みを作るにはその活動主体が必要ですが、会ってみると話が違うことばかりで、ひどい時にはセミナー当日になって受けた情報と全く違う実態が判明した、といったことを繰り返しました。その後私は帰国しましたが、現場で試行錯誤を続けた末、2005年にSopro Novoというボランティアの活動主体を結成することができました。今日までの8年間で、145都市で1,000回近くのセミナーを開催、約3,300名の指導者養成ができました。彼らに教わる子供達は、40万人近くになるはずです。

一方、ヤマハ音楽教室は、やっと昨年(2013年)再開に着手できました。3月に直営センターを暫定開業、8月に幼児科パイロットクラスを開講し、今年3月、建物の手入れが完了、講師も安定数確保できたことで、改めて開所式を催すことができました。活動停止前の講師さんも招き、喜んでもらうことができたのは幸いでした。今後は協力先を確保しながら、徐々に活動地域を広げていくつもりです。

以上の演奏する人を増やそうという普及とは別に、ブラジル独自に、楽器そのものの認知をしてもらうためのPlay Nowという活動も行っています。Shopping Center内に設けた特設会場でより多くの人に楽器の実物に触れてもらう機会を提供する活動です。ブラジル各地の主要都市にあるShopping Centerで2013年は16回(例; Patio Brasil/Brasilia、Rio Mar/Recife、Salvador Shopping、Boulevard/Belo Horizonte、Barra Shopping/Porto Alegre、Vila Olimpia/São paulo、等々)来場者は、計約26.5万人、1会場平均1.6万人強でした。今年は17回を予定しています。

アカデミー受賞映画『それでも夜は明ける』の重層的余波

英国人監督スティーブ・マックイーンによる映画『それでも夜は明ける』は、3月2日にアカデミー賞最優秀作品賞を受賞したことから世界中で話題になっているが、同映画がブラジルにもたらした様々な反響は、他の国にはありえないような重層的なものとなっている。

この映画は、音楽家として活躍し、幸福な家族を築いていた自由黒人である主人公サイモン・ノーサップが、1841年、騙されて南部ルイジアナに奴隷として売られ、12年間隷属生活を強いられたという実話に基づくが、世界最大の黒人奴隷輸入国ブラジルでも数多くの同様のドラマがあったという歴史認識の視点からの反応が第一の余波であった。

米国の奴隷制に比べ、ブラジルの奴隷制は温情主義的で人種間の関係はより温和なものであったとする、社会人類学者ジルベルト・フレイレらの“定説”に批判的なサンパウロ学派からのアカデミックな反応としては、3月2日付けフォーリャ・デ・サンパウロ紙学芸欄に掲載された論文（歴史人類学者リリア・シュワルツと歴史学者マリア・エレナ・マシャードの共著）が、典型的だろう。ブラジルの奴隷制は、『それでも夜は明ける』で描かれたものと本質的に異なるものではなかったから、何千ものノーサップがブラジルには存在したのであり、奴隷制の廃止についてはブラジルは西洋で最後の国であった、という歴史的事実が我々ブラジル国民に重くのしかかっているのだ、という趣旨であった。

翌3月3日の同紙に寄稿したのが、外交官フーベンス・ヒクペロ（元財務大臣、元UNCTAD事務局長）で、奴隷解放運動家ルイス・ガマ（1830～82年）の闘いの半生を略述したうえで、批評家ホベルト・シュワルツによって再発見された彼の手記は「誉れ高く真実の物語で映画『それでも夜は明ける』よりもはるかに優れている」と評価している。

その手記の書き出しは「自分は、ミナ海岸（現ベナン）出身の、自由アフリカ黒人ルイーザ・マインを母として生まれた」というもので、父親は白人だが、母親は西アフリカ出身の元奴隷の自由黒人だ。10歳の時、実の父親から奴隷として売り飛ばされ、17歳で法学生から学問の手ほどきを受け、自由黒人となって、法学を学んでから、弁護士として奴隷解放運動に邁進する。ブラジルの奴隷制が廃止されたのは1888年であるから、それよりも20年以上も前から解放運動に取り組んだ彼のおかげで、解放された

奴隷の数は500人以上といわれている。

詩人でもあったガマは、死の2年前の1880年に友人のルシオ・メンドンサに対して送った手紙のなかで、自分自身の7年間の奴隷時代の生活について詳しく書き残している。これが現在ガマの手記とされる文書であり、文字による史料をほとんど残さなかったブラジル黒人奴隷の、ほとんど唯一の例外といえる、奴隷体験文書である。

もう一つ特筆すべき“現象”が、翻訳書のベストセラー化である。

ノーサップ自身が書き記した1853年刊行の原著のポルトガル語翻訳が、二つの出版社からそれぞれ別の訳者によって出されているが、いずれも、3月に入って、好調な売れ行きを示し、ベストセラーリストのノンフィクション部門で、3位ないし4位を4週も連続でキープしている。160年前に米国で出版された奴隷体験手記の翻訳が、ペーパーバック廉価版とはいえ、何故売れるのか。アカデミー受賞映画の影響だけでは説明がつくまい。やはりサイモン・ノーサップの同時代人であったルイス・ガマやあるいはジョアキン・ナブーコらが奴隷解放運動を展開した、という自国の歴史を振り返る、現代のブラジル人読者が多くいるから、と解釈すべきだろう。

さらに、TVドラマにも話は広がっていく。

彼の母親ルイーザ・マインをモデルとした、作家アナ・マリア・ゴンサルヴェスの大河小説『色の瑕疵』（2007年）を基にして、このルイス・ガマの一生をテレビドラマ化する計画が進められていたが、アカデミー賞映画のインパクトもあって、この具体化が一挙に早まり、監督はルイス・F・カルヴァーリョが決まっている。

この歴史小説の大作については、本欄（2007年11月号）で簡単な紹介をしたことがあるが、少女時代に奴隷としてバイアに売り飛ばされ、捕鯨場や農場で働かされてから、身請け解放奴隷となって、自営パン屋を開くが、イスラム系奴隷蜂起としては最大規模の「マレーの乱」に関与したことで逃亡・潜伏せざるをえなくなり、さらには、アフリカに回帰して、女実業家・貿易商となる、といった19世紀のブラジル史が凝縮された、歴史小説である。彼女の息子がルイス・ガマであるが、このTVドラマ、ブラジル版『それでも夜は明ける』が放映されれば、また大きな話題となるだろう。

奴隷制時代は単なる過去ではない。この歴史再認識をアカデミー受賞映画が再生化させてくれた、ともいえるだろう。

ブラジルにおけるM & A投資機会

片岡 万枝

〈プライスウォーターハウスクーパース(株)トランザクションサービス シニアマネージャー〉

2011年9月より、PwC (PricewaterhouseCoopers) のブラジル法人のトランザクションサービス部に2年間所属し、日本企業のブラジルにおけるM&A投資やグリーンフィールドでの参入や撤退に関与してきました。恐らく、この2年間日本人としては最も多くのブラジルM&A案件に関わることできたと自負しております。現在、ブラジルへの参入や、さらなるビジネス拡大、あるいは撤退を考えておられる企業の皆様に少しでもお役に立てるよう、私の経験からご報告させていただきます。

日本企業進出の最近の傾向

ブラジルの名目GDP(2012年22,543億USドル)は、ASEANのGDP合計と同じぐらいで、年度によっては、英国を抜く規模となっています。この市場の大きさに対し、日系企業の進出数はまだ、267社(2012年)、すでに1,000社に達しているインドなど他の新興国と比較しても日系企業のプレゼンスはまだ大きくないといえます。

その最大の要因は、やはり日本とブラジルの距離にあるといえるでしょう。日本で入手できるブラジルの情報は非常に限定的で、またブラジルを訪問したことがないマネジメント層が多いため、報道でGDPの成長が鈍化したとか、アメリカの量的緩和の縮小でブラジルから資金が引き上げられるとか、否定的な情報が日本で流れると、とたんに日本本社の投資マインドは弱含みに切り替わってしまうケースが多く見られます。しかし、ブラジルが南米の中心都市として魅力的な投資マーケットであることは多くが認めるところであり、M&A投資をサポートする立場からすると、むしろ投資が過熱しているタイミングよりも、若干弱含みの現状の方が、価格交渉がしやすい状況が整っているといえます。目先の一時的な要因に流されず、ブラジル投資の可能性を検討することが肝要です。

日系企業進出が最も増加している自動車産業を見てみると、ブラジルにおける末端マーケットシェアが、日系企業合計でも約10%程度ということが影響し、サプライヤー企業のブラジル進出がなかなか進みにくいという状況にあります。国内調達率必要条件を満たせば、自動車工業製品税IPIが課されない等の施策がブラジル政府より出され、サプライヤー企業の進出を後押ししていますが、本当に進出して十分に採算がのるのかを悩まれ、投資を躊躇される企業もあります。一方で、他の産業への展開可能性や日本におけるクライアント関係に縛られないビジネスの拡大に可能性を見出し、進出を決定される企業もあります。日本のオート進出企業各社は増産体制にあり、ブラジル市場で本気に戦う態勢を整えつつあ

り、欧米の上位企業も販売台数を伸ばしているものの、アジア企業からシェアを奪われつつあるのが現状です。日系自動車メーカー各社が市場シェアを増やしていくことが今後サプライヤー企業を含めた日系企業進出の鍵となると思います。

自動車産業以外にも、超深海油田プレサルの発見等にもない、ブラジルでは造船業の国内育成も40年ぶりに始動し、日本の造船各社も進出を決めています。造船業の日系サプライヤー群の進出も今後進んでいくのではないのでしょうか？

また、PNAD/IBGEによると、ブラジルでは2009年から15年までに約40百万人の新たな中間所得層が生まれると予測されており、新中間所得層の台頭にともなう消費市場の拡大に注目した日系企業の進出も目立ってきています。

ブラジル人の消費性向は高く、日本にはあるがブラジルにはまだない商品やサービスをうまく展開できれば、ビジネスチャンスの広がりは大いといえるのではないのでしょうか？ 商社各社のアグリビジネス分野への直接投資の増加も最近の傾向となっています。

ブラジル投資における留意点

ブラジルの市場は、中国やインドなどの新興国と比較しても、ある程度成熟度のあるマーケットです。そのため、日本における顧客関係やノウハウを持ち込み、そのままビジネスを展開できる企業は、グリーンフィールドでの参入が向いているでしょう。一方ブラジルにおける新たな顧客関係の確立やブラジル特有のノウハウが必要なインダストリーにおいては、M&Aによる参入が効果的な場合が多いと思います。

また、ブラジルにおいて監査を受けていない企業は、往々にして二重帳簿となっている可能性があります。現地企業の買収に際しては、きっちりデューデリジェンスを実施し、リスクの程度を把握し、リスクをミニマイズする対策を立ててから、買収を実行する必要があります。

また、進出にあたっての体制では、ポルトガル語でのコミュニケーションに不自由なマネジメントを現地のレップオフィスに派遣し、現地事情や買収ノウハウに通じた外部機関をまったく用いず、独自の市場調査によって進出を検討される日本企業がときどきあります。これは、日本市場に外国人のみで調べて参入の可否を決めるような非常に危険な行為に等しいと思います。しかし、私の経験から、ブラジルは、現地の専門家の力を借り、スピード感をもって意思決定していくということが必要な市場と考えます。



理事会開催

平成 25 年度第 4 回理事会が開催された。

日時：3 月 24 日 (月) 14:00 ~ 17:00

場所：協会会議室

主要議題：平成 26 年度事業計画書・収支予算書の承認。事業計画書では、当協会の財務基盤強化を最重要課題と位置づけ、会員数の増強を図るとともに諸施策を着実に実行することにより収益力の強化を図ることが確認された。

副会長の選定一池田維副会長辞任にともなう、島内憲理事の副会長選定。その他、代表理事および業務執行理事の職務執行状況の報告。



平成 26 年度第 1 回理事会

日時：5 月 26 日 (月) 14:00 ~

場所：協会会議室

主要議題：平成 26 年度事業報告・計算書類等の承認。定時総会の招集の決定。公益目的支出計画実施完了確認請求書の承認。代表理事及び業務執行理事の職務執行状況の報告。



会員総会開催

日時：6 月 16 日 (月) 15:00 ~ (終了後、懇親会開催予定)

場所：IDB (米州開発銀行) アジア事務所会議室

主要議題：5 月 26 日開催の第 1 回理事会の決定による。

☆ イベント ☆

☆ 第 27 回ランチョン・ミーティング

日時：2014 年 5 月 14 日 (水) 正午 ~ 午後 2 時

講師：沼田 行雄 前ベレン総領事

演題：資源の宝庫・物流の拠点：ブラジル北部の新たな可能性についてお話

し頂きます。

場所：アークヒルズクラブ (アーク森ビル イーストウイング 37 階)
東京メトロ南北線「六本木 1 丁目」
または銀座線「溜池山王」下車

参加費：会員 5,000 円 非会員 6,000 円 (当日会場にて申し受けます)

申込み：先着順 50 名様まで。食事手配の関係上、必ず事前に協会事務局へ。お申し込み後ご欠席される場合で、5 月 13 日 (火) 午後 5 時までにご連絡いただけない場合は、参加費ご負担をお願いいたします。

その他：ドレスコード (男性) ジャケット・ネクタイをご着用下さい。

☆ 新刊書紹介 ☆

☆ 『社会自由主義国家 ブラジルの「第三の道」』 小池 洋一

1990 年以降模索されてきた国家・市場・市民社会からなる多元的な制度としての「社会自由主義国家」を支える参加型予算、連帯経済、CSR (企業の社会的責任) といった制度、その経済的基盤となり、持続的成長を左右する産業政策、科学技術・労働政策を論じ、成功例といわれるクリチバ市の都市政策の例を検証している。

(新評論 2014 年 3 月 238 頁 2,800 円 + 税)

☆ 『ブーゲンビリアー 遙かなる大地 上・中・下』 中島 宏

1909 年に 28 歳で商社員としてリオデジャネイロへ渡った出口峯一郎が、第一次世界大戦へ向かう激動の時代に出口商会を興して事業を拡大していくなかで、ドイツ系のマリエッタとの 9 年越しの恋を成就して結婚、商社経営を取り巻く状況の大きな変化、そして 22 年に結核療養所に入っているマリエッタに峯一郎の急死の知らせが届いた後の一族の姿を、実在の移民の記録からまとめ描いた長編伝記小説。著者も畜産その他事業を手広く展開しているサンパウロ在住の企業移民子弟。

(文藝春秋企画出版部発行 文藝春秋 発売 上 - 2011 年 12 月 559 頁、

1,800 円、中 - 2012 年 7 月 427 頁 1,700 円、下 - 2013 年 2 月 483 頁 1,700 円 + 税)

☆ 『南米への移民 コレクション・モダン都市文化 第 93 巻』 細川 修平

大正から昭和初期に花開いたモダニズム研究の総合資料集全 100 巻の一冊。永田稠日本力行会会長による南米視察巡回写真集である『南米日本人写真帖』(1921 年発行、日本力行会)、短期間に農園経営で成功して帰国した古澤清外の『ブラジル移民としての五年間』(29 年、海外興業)、25 年間に中南米で過ごした外務省きつての中南米通であった甘利造次の『コロンビア国事情』(30 年、植民同志会)の 3 点の文献をそれぞれ写真復刻し全編収録、これに編者による解説と詳細な年表を付している。

(ゆまに書房 2013 年 12 月 684 頁 18,000 円 + 税)

☆ 『踊る! ブラジルー 私たちの知らなかった本当の姿』 田中 克佳

ブラジルの魅力を、サンバ、美しい自然と謳歌する人たち、搾取構造下にある労働者、カーニバルの美学、ブラジリアの建設、日系人を含む多入種国家、かつてのゴールドラッシュの痕跡、近未来文化の片鱗などを、全編実に美しいカラー写真とともに綴っている。

(小学館 2014 年 3 月 141 頁 1,500 円 + 税)

☆ 『さがし絵で発見! 世界の国々 12 ブラジル』

「さがし絵」でブラジルと日本の「ちがいとおなじ」を見つけることから入り、ブラジルってどんな国、大都市、世界中からの移民、多様な土地、日常生活、食生活、芸術・文化、教育、ポルトガル語、日系人を通じての日本との深いつながり、農牧・工業・資源・エネルギーに至るまでを、絵でやさしく解説した児童書。

(稲葉 茂勝 乙牧 三喜子絵 多田 孝志監修 あすなろ書房 2013 年 12 月 32 頁 2,800 円 + 税)